名著に学ぶ経営 ～ その９：名経営者達

「一番手本にしている経営者は誰ですか」と問われると、ロバート・オーエンと答える。大抵の人がどの会社の経営者だったかと思われるだろうが、世界史で空想的社会主義者として習った、あのロバート・オーウェンである。１７７１年生まれの彼は、３０歳の時妻の父親が経営するスコットランドの紡績工場を引き継いだ。当時の英国はマルクスやエンゲルスの著作にも描かれているような過酷な労働が一般的であったが、そんな中今でいう福利厚生に力を注いだ最初の経営者であった。未成年や女性の労働時間短縮、世界初の保育施設の設立、安価な生活物資の提供など労働者の生活改善に尽力した。しかも工場の業績は飛躍的に上昇し大きな利益も上げた。しかし出資者からの反対を受け退任、その後は労働組合の設立や工場法（今でいう労働基準法）の制定に動くなど、一貫して労働者の為に生きた人である。ちなみに彼が模範的な経営を行ったニューラナークの紡績工場は１９６７年まで操業を続け、今は世界遺産となっている。

その後の歴史に残る名経営者、カーネギー、ロックフェラー、フォードなど一通り自伝や伝記を読んだが、典型的な偉大な経営者として、中小企業の一経営者たる私としてはとても恐れ多くて参考にしようなどとは思えなかった。日本の松下幸之助や本田宗一郎にしても同じような感覚だった。

現存する経営者としては、私が入社して間もなく「京セラ～超成長の秘密」という本を買って座右の書の一つとし、稲盛和夫が京セラを創業し、中小企業から優れた大企業に成長していく過程を学んだ。「敬遠愛人」や「利他」といった稲盛哲学にも傾倒した。当然京セラとの取引にも憧れ、飛び込み営業的なことをやって受注にも漕ぎ着けた。今では京セラのいくつもの工場に納入しているが、担当者の人達と接しては殆ど稲盛哲学を感じたことはない。むしろがむしゃらに働く社員が多い会社だというイメージで、トップと前線との落差を目の当たりにした。むしろ日本電産を創業した永守重信の型破りなやり方の方が大きな刺激となった。私のようなスケールの小さい経営者にはとても真似ができるものではないが、固定観念を破るという点においては良い手本になった。

私にとって優れた経営者というのは二通りに分かれる。一つは手本となるような典型的な経営者、松下幸之助、稲盛和夫、エーワン精密の梅原勝彦などである。彼らの言動にはいちいち頷かされるものがある。もう一方は到底理解を超えた経営者、本田宗一郎、永守重信、未来工業の山田昭夫などである。ビルゲイツやスティーブジョブズ、孫正義なども到底私の理解を超えている。ビルゲイツと孫正義は孫子の兵法の実践者といわれるから理解できそうなものだが、やはり私には雲の上というか宇宙の上のような存在である。しかしこれからはそういった理解できない経営者達を理解する事に努め、何がしか理解ができたところで私の経営者としての飛躍があると思う。